

2026年4月26日 説教「金持ちとラザロ」

ルカの福音書 16章 19～31節

今回は 16章 14～18節を通して、金の好きなパリサイ人のように律法を守ることによって「自分を正しい」とする道ではなく、「福音に生きる」道について教えられました。

### 1. 金持ちとラザロの生活 (19～22節)

①ある金持ち (19) 「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。」

ここからは再びたとえ話です。ここに一人の金持ちがいました。彼は高級な紫色の衣と細布を着ていました。この「細布」とは「やわらかい亜麻布」(2017年版新改訳)です。身なりにお金がかかっているばかりでなく、彼はその生活においても贅沢でした。自分の欲望を満たすために、遊び暮らしていたのです。

②門前にすわるラザロ (20～21) 「ところが、その門前にラザロという全身おできの貧しい人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。」

それと対照的な人がいました。ラザロという名の人で、くだんの金持ちの家の門前に横たわっていました。彼の外見と言え、全身はおできだらけです。経済的な寄る辺がなく、金持ちの家から棄てられた食べ物で腹を満たそうと思うほどでした。その日常においては、犬がラザロのおできをなめることもあるほどに惨めでした。

③二人の死 (22) 「さてこの貧しい人は死んで御使いたちによってアブラハムのところに連れていかれた。金持ちも死んで葬られた。」

年月が過ぎ、地上での恵まれない生活を送ったラザロは死にました。しかし、何よりも感謝なことに、彼は御使いたちによってアブラハムの所に連れていかれたのです。つまり、御国へと導かれたのです。一方、富んでいる人にも寿命があります。この金持ちも死んで葬られました。地上的には、墓に葬られたのですから恵まれていました。

### 2. ハデスからの叫び (23～26節)

①ハデスで苦しむ金持ち (23) 「その金持ちは、ハデスで苦しみがら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。」

金持ちが向かったのはハデスでした。ハデス(陰府あるいは地獄と訳される)において、金持ちはどうしていたでしょう。彼は苦しみもだえていました。ところが、見上げて見るとはるかかなたにアブラハムがみえました。驚いたことにその懐にはあのラザロがいたのです。こうした情景説明は、地上に生きる者たちにわかりやすく伝えられたと考えられます。

②金持ちの叫び (24) 「彼は叫んでいった。『父アブラハムさま。私を

あわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』

そこで、金持ちは叫んだのです。「アブラハムさま。あわれんでください。近くにいますラザロをこちらによこして、炎の中で苦しんでいる私の舌を冷やすために、水で潤わせてください。」

- ③大きな淵(25~26)「アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間は、悪い物を受けていました。しかし、彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』」

ところがアブラハムは言いました。第一に、金持ちは生きている間に良い物を受けていた。そして死後に苦しみ悶えている。第二にラザロは地上では悪い物を受けていた。しかし、死後に彼は良い所で慰めを受けている。第三に、ラザロが置かれている所と元金持ちが今いる場所の間には大きな淵があり、越えることは到底できない、という事でした。

### 3. アブラハムのこたえ (27~31 節)

- ①金持ちの願い (27~28)「彼は言った。『父よ。ではお願いですラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることがないように、よく言い聞かせてください』」

元金持ちは願うのでした。それは、父親の家にラザロを送って、5人の兄弟たちに、自分がこれほどハデスで苦しんでいるので、こうならないように言い聞かせてもらいたいということでした。

- ②彼らにはモーセと預言者がある (29~30)「しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者があります。その言うことを聞くべきです。』彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』」

ところが、アブラハムはそれを受け入れませんでした。その理由は地上においては、モーセの律法と預言者の導きがあるので、彼らはそれを聞くことが大事だということです。しかし、元金持ちは引き下がらず、ラザロのように天にある者が行けば、彼らは悔い改めることになるとうい下がったのです。

- ③彼らは聞き入れない(31)「アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」

しかし、アブラハムも意見を変えません。律法や預言者の教えを受け入れない者たちは、たとい死人の中から生き返ってメッセージを与えたとしても彼らはそれを受け入れることはない、という応えでした。

### 《展開と結論》

今朝の聖書箇所はあくまでもたとえ話です。主イエスが事実を述べられたとするなら、矛盾することがあります。つまり、この話が霊的世界の事実であるとすると、アブラハムはまるで神の使いあるいは特別な天的存在のように読めてしまいます。しかし、アブラハムは地上で、神の民の始祖であり優れた信仰の指導者であったことは確かですが、どこまでいっても一人の人間でありました。ですから、ここで主イエスはパリサイ人達にとっては馴染みの深いアブラハムをたとえの中に用いたのです。天においては、アブラハムであろうと、モーセであろうと、民衆であろうと、立場に上下があるはずありません。しかし、事柄を理解するために、ここでは天にあるアブラハムを、そこにいる代表者のようにして語らせているのです。

また、もう一つ確認しておきたいことは、この話は死後の出来事を教えている部分ではありません。ここを、セカンドチャンス論などの根拠にすることは正しくありません。ただ霊的世界のヒントとなることはあります。アブラハムラザロのいる所と、金持ちのいるハデスの間には、大きな淵があるということです。そしてそこは渡ったり、越えたりすることはできないということです。であればこそ、私たちが地上に生かされている間に、イエスを救い主として認め、信じて歩むことが大切なのです。そうすることで、御国の門は開かれていくのです。ここでは、モーセの律法と預言者が与えられているとありますが、私たちに旧約に加えて新約聖書も備えられています。それは悔い改めに導かれるために、大いなる役割を果たしていくのだと覚えましょう。

そうしたことを踏まえつつ、この聖書箇所注目したいのは、16章全体の中から、この箇所を読んでいくことです。1節から13節を通して、金持ちと管理人のことが語られ、神と富とに仕えることができなというお言葉(13節)で結ばれました。また14節から18節においては、「金の好きなパリサイ人」がイエスをあざけったことから始まっています。そして、今朝の箇所では、金持ちとラザロの話へと進んできています。そして、ここでは金持ちが生きている間に「良い物を得た」とあります。しかし、問題は彼が、いつも紫の衣や上等な布地の服を見つけ、毎日遊んで暮らし、神の恵みなどは全く忘れていたことです。放蕩息子のたとえ話では、その息子は贅沢な生活を短期間送った末に極貧となり、我に返って父なる神と父親に立ち戻りました。しかし、この金持ちは、最後まで神を無視し、悔い改めずにハデスに行ったのです。一方、ラザロ(その意味は「神が助け」)は、神への信仰があり、死んだ後にアブラハムと同じ所に移されたのです。金持ちとラザロはその立場が逆転しました。問題は神に依存するか、この世の富や財に依存するかです。金持ちの中にも、信仰深い人がいます。富に依存せずに生きている人々がいます。しかし、富はそこに依存させる魔力があるのも事実でしょう。その病は、パリサイ人の内にも放蕩息子の兄弟たちのうちにも、そして私たちのうちにも潜んでいるのです。自分が何に依存して生きているかを考えましょう。そして、神に立ち戻りましょう。